



TITLE:

在宅療養高齢者の生活の場の特性

AUTHOR(S):

谷垣, 静子; 松田, さおり; 上野, 加寿子

CITATION:

谷垣, 静子 ...[et al]. 在宅療養高齢者の生活の場の特性. 京都大学医療技術短期大学部紀要. 別冊, 健康人間学 1999, 11: 29-34

ISSUE DATE:

1999

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49568>

RIGHT:

在宅療養高齢者の生活の場の特性

谷垣 静子, 松田さおり*, 上野加寿子**

* 京都大学医学部付属病院

** 前京都大学医療技術短期大学部

A Study on Living Situations of Elderly Outpatients

Shizuko TANIGAKI, Saori MATSUDA and Kazuko UENO

Abstract: This study is to clarify the living situations of elderly outpatients through an interview survey based on the “Repertory Grid Technique”.

The results are as follows:

- 1) A significant correlation is observed between scores of anxiety state (STAI) and calmness state of mind.
- 2) A significant correlation is found between dwelling years and comfortability, peacefulness.
- 3) A good impression of their living space is associated with three characteristics: duration of occupancy, autonomous thing and having visitors at any time.

はじめに

寝たきりの高齢者にとって、居室は生活の場である。寝床を中心とした高齢療養者が生活の場をどのように捉えているかを知ることは、その人らしい生活を大切にされた看護を实践するうえで重要である。その人らしさを重視することは、その人の生活の質を高めるといわれている。しかし、在宅療養高齢者がどのように生活環境を認知しているかを明らかにした研究は少ない。

生活範囲が限られたなかで、快適な療養生活を過ごすには、物理的環境側面と心理的環境側面があると考えられる。どちらの側面も相互に関連しており、様々な環境要因があると思われる。特に、在宅療養高齢者が居室環境を評価する場合の特徴に、療養者個々人の個別的な「生活体験」に基づくことがあげられる。

そこで、本研究では、在宅療養の高齢者の心理状態と、居室における特性を調査・分析し、在宅療養高齢者の居室環境を考えるうえでの基礎資料を得ることを目的とした。

1. 方 法

対象：65歳以上の在宅療養者10名、平均年齢83.8歳（72～90歳）

日常生活自立度：ランクC 2～1名、他はランクA～B、全員意識の混濁はなし

調査期間：平成8年6月4日～7月29日

調査内容・方法：①属性、②部屋の照度、③部屋の大きさ等、④心理テスト（筆者らは、金井らによりその有用性が示唆されている¹⁾ STAIを使用した）、⑤室内雰囲気評価法として Semantic Differential Method（以下SD法と略す）を使用した。12評価項目を用いて、7段階評価とした。同時に、ラダーリング法によ

表 1

Case	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
寝たきり判定	C2	B2	B2	B2	B2	B2	B2	B1	B1	A2
年 齢	87	80	86	85	72	83	86	90	84	85
住 宅 周 囲	山を切り開いたところに建つ。見晴らしがよい。	公団，マンションが立ち並んでいる。	坂の多い，住宅街。大きな道に面している。	簡素な住宅街。密集している。	住宅街，近くに小学校	密集住宅街	入りくんだ住宅地	簡素な住宅街	近くに小学校がある山の手	大きな通りから入った住宅地
窓 の 景 色	草木が見える	見えない	見えない	木が見える	ブロック塀	庭が見える	道と家	庭	公園	裏の家
調査員から見た部屋の印象	きれいに片づいている	雑然としている	せまい	こざれい	雑然としているが，広く感じる	歩くスペースがない	こぢんまり片づいている	仕事場	雑然としている。テーブルの上には食器や洗濯物がある	きれいに片づけられている
家 族 構 成	妹と二人	妻と二人	妻と二人	妻と二人	6人家族	娘と二人	娘夫婦の3人	娘と二人	次男と二人	一人暮らし
居 住 年 月	20	40	80	50	40	60	50	50	30	52
居室の大きさ	六畳	八畳	四畳半	八畳	八畳	八畳	六畳	六畳	四畳半	六畳
窓	ある	ある	ない	ある	ある	ない	ある	ある	ない	ある
STAI										
状 態 不 安	66	29	29	27	28	33	23	25	36	23
特 性 不 安	64	26	29	30	30	27	29	27	32	31

表2 状態不安と各項目との関係

項 目	相関係数
居心地のよい—居心地の悪い	-0.581
安らぎのある—安らぎのない	-0.675*
楽 しい—つまらない	-0.171
くつろげる—くつろげない	-0.644*
明 る い—暗 い	-0.185
静 か な—う る さ い	-0.710*
落ち着きのある—落ち着きのない	-0.946***
広々とした—狭 くる しい	-0.223
すっきりした—ごちゃごちゃした	-0.032
にぎやかな—寂 し い	-0.449
開 放 的 な—閉 鎖 的 な	-0.018
自 由 な—束 縛 され た	-0.531

* P<0.05, *** P<0.001

る聞き取りを実施した。

2. 結 果

1. 対象者の属性 (表1 参照)

家族構成はひとりを除き、ふたりあるいは独居である。

2. 状態不安 (STAI) と項目の関係 (表2 参照)

状態不安と「落ち着きのある」(P<0.001), 「安らぎのある」(P<0.05), 「くつろげる」(P<0.05), 「静かな」(P<0.05)の項目との相関が認められた。

3. 項目と居住年数の関係

居住年数と「居心地がよい」「安らぎのある」の項目 (P<0.05) との相関関係が認められた。

表3 居室の評価構造

	住みな れてい る	自分の 思うと おりに できる	人の出 入りが ある	外的環 境	静かさ	物が多 い	どこに も行け ない	部屋が 広い	ひとり 暮らし	物がな い	騒 音	気持ち を明る くする
居心地の良い	7	7										
安らぎのある	7	7										
くつろげる	7	7	7									
落ち着きのある	7	7		7	7							
自 由 な	7	7										
楽 し い		6, 7	7									
開 放 的 な		7		7								7
広々とした		7						5, 7	6	7		
明 る い			6	7								
にぎやかな			4									
静 か な					7							
束 縛 され た							1					
寂 し い							3	3	3			
すっきりした										7		
狭 苦 し い						3						
ごちゃごちゃした						1~2						
つまらない										1		
う る さ い											1~3	
落ち着きのない											1	

4. 居室の評価構造（表3参照）

ラダーリングにおいて表現されたすべての評価項目の内容を分析し、評価項目間の因果関係を示すマトリックスを作成した。

3. 考 察

1. 項目別得点と状態不安の関係

状態不安の得点と有意な関連の認められた項目は、「落ち着きのある」であった。不安レベルが低い高齢者のラダーリングでは、自分が生活している環境に対して、「安らぎのある」「くつろげる」「居心地のよい」という感情を抱いており、その理由としては、自分固有の生活空間であるため自分の思い通りにできるためというのが中心であった。また、今回調査した高齢者の多くは、現在の住宅に長年住んでいるということもあり、住み慣れた環境にあったこともこれらの感情を抱くことにつながっていると考えられる。

一方、不安レベルが高い高齢者は、自分が生活している環境に対して、「安らぎのない」「くつろげない」「落ち着けない」という感情を抱いており、その理由としては、隣の部屋がうるさい、ゆっくりした気持ちになれない、やかましいといった理由が中心であった。この要因として考えられることは、隣の部屋の者との関係が良好でなく、家族関係に対する思いが、このような感情を抱く結果を招いたのではないかとということである（図1参照）。不安レベルが低い高齢者の中に、車の音がうるさい・やかましいといった騒音に対し、不満を述べる人もいたが、そのことが居室環境の評価に大きく影響してはいなかった。また、不安レベルの高い高齢者からは、不安レベルが低い高齢者が述べたような自分の思い通りにできる環境であるという答えは得られていない。このことは、日常生活の場の中で、言いたいことが言えて、思い通りの生活が送れていないことを意味すると考えられる。住みなれた居室の中であっても、常に精神的に安定した生活が送れるというものではなく、状態不安を起こすような事柄が生じたとき

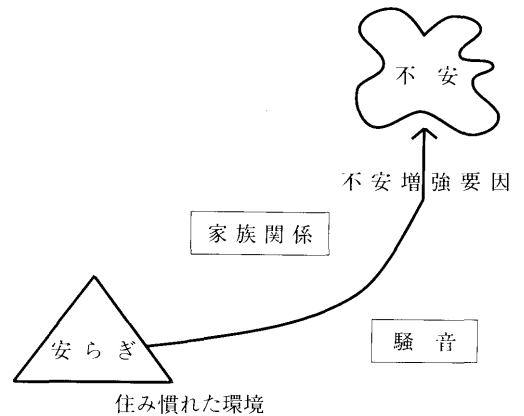


図1 状態不安の変化要因

には、居室環境の評価が変化するといえる。

以下、状態不安（STAI）の高かったAさんと低かったEさんを紹介する。

事例Aさん

Aさんは87歳の女性である。寝たきりの状態（ランクC）のAさんは妹と、ふたりで暮らしている。妹は腰痛があるために介護を負担に感じており、いつも口論が絶えない。妹との折り合いが悪いため、Aさんはデイサービスをとっても楽しみにしている。ほとんどベッド上の生活をしているAさんは、思うようには身体が動かせない上に心理的にも満たされない状況にある。

寝たきりになるまでのAさんと妹との関係は決して悪いものではなかった。徐々に寝たきり状態が進行し、介護の負担も増強する中で、関係悪化を招いたと思われる。Aさんの場合は、妹の腰痛も重なったことが大きいと思われる。

事例Eさん

Eさんは72歳の女性である。家族は6人、3世帯家族である。脳梗塞のために片麻痺となり、車椅子を利用している。日中のほとんどはベッドで過ごし、日常生活のほとんどが介助を要する。夫は献身的であるが、体力の問題で介助のほとんどは嫁が行っている。入浴の場合では、車椅子で風呂場まで連れていくのは夫の役割で、そのあとは嫁が介助をしている。住まいは、同じ土地に高齢者の世帯と若い者の世帯が

隣り合わせに住んでいる。

AさんとEさんを比較すると、一日をベッ上で過ごしている点では同じであるが、「落ち着きのある」という点では相違がある。その大きな要因は、家族が介護をどう受け入れているかという点である。また、家族人数（介護の協力体制）にも差がある。独りで抱え込んでいるAさんの妹と、役割分担を決めて介護にあたっているEさんの家族とでは、心理的にも身体的にも負担という点で差がある。Aさんの場合、姉妹関係が以前から悪かったというものではない。病状の悪化と妹さんの持病が重なってこじれていったのである。徐々に身体機能が低下していく中では、介護力の強弱がその後の家族関係の善し悪しで決定しかねない。このようなことから、介護力のアセスメントは重要である。島内²⁾は在宅ケアにあたり家族の日常生活力量や問題対処力を具体的にとらえることは必須条件であると述べている。介護力が低いと思われるところには、早期から社会資源を導入することも考えるべきである。また、家族関係を過去に帰り修復することは困難であり、立ち入るべきことでもない。しかし、要介護者の日常生活の基本的ニーズを満たすことで、心穏やかとなり、介護者に対しても素直になれることもある。要介護者の「ありがとう」の一言が介護者の心を穏やかにするのである。

2. 評価項目と居住年数との相関関係

項目別得点と居住年数の関係では、「居心地がよい」「安らぎがある」に相関関係が認められた。住み慣れた場所は居心地がよく、安心して暮らせる場所であるといえる。高齢者がよく言う「このまま、ずっとこの家に住み続けたい」という希望をかなえることは、その人を最後まで豊かな気分で暮らせる生活空間を保障することになるのではないかと考える。

3. 居室の評価構造

全対象者自身の言葉で表現されたすべての項目内容を分析し、因果関係をマトリックスにした(表3)。この結果から、「自分の思うとおりにできる」「住み慣れている」といった内容で

評価得点が高いことがわかった。在宅療養高齢者の居室の評価は物理的な側面や視環境だけを考えるのではなく、そこに住む家族や友人、あるいは他人との交流や人間関係が影響していることが示唆された。

今回の調査では、居室評価を物理的・視覚的な角度から分析を試みたが、評価の根底には人間関係があり、その上に物理的・視覚的な点が影響していることがわかった。また、高齢者の場合、長い年月を経て順応し、住み慣れた環境をつくり出していることがわかった。

北川は³⁾病や障害を持つが、他者からの援助を必要としようが、高齢者は、自分の生きてきた時代や社会文化の中で培ってきた価値や知恵、ネットワークを駆使して、以前と変わらない自分自身であり続けようとしているのであると述べている。暮らし続けてきた場所で在宅療養を願う高齢者の多くは、そこで生活し続けることで、自分らしさを主張しようとしているのではないだろうか。自分らしさの主張こそ、生きている証なのかも知れない。

在宅療養の環境をより良いものにするには、家族・近隣者との人間関係を円滑かつ良好に保持することが大事である。在宅の居室は、長年にわたってその人が生活してきた場であり、その人が生活しやすいように工夫されている。看護者はそのことをよく認識したうえで、療養者とともに生活環境改善の方策を検討する必要があると考える。また、人の出入りは、看護者もその一員であることを認識し、処置だけに追われることなく、社会交流を含めた対応が望ましい。

5. 結 論

1) 状態不安の得点と「落ち着きのある」の項目の間に有意な($P<0.001$)相関関係があった。

2) 居住年数と「居心地がよい」「安らぎがある」の項目に相関関係($P<0.05$)が認められた。

3) 居室の好的印象の理由の多くは「住み慣

れている」「自分の思う通り出来る」「人の出入りがある」であった。

引用・参考文献

- 1) 金井和子他：心理テストの高齢者用簡易化に関する検討—STAI を中心に—，日本看護研究学会雑誌，1995：18(3)，31-37
- 2) 島内 節：在宅ケアと家族の支援，保健の科学，1989：31(8)，503-507
- 3) 北川公子：生き方の質を保証する高齢者看護，ナーシングデータ，1997：18(8)，16-20
- 4) 秋山哲男：高齢者の住まいと交通，東京：日本評論社，1993